

報告③

古代山城にみる渡来系技術

講演者紹介

亀田 修一（かめだ しゅういち）

岡山理科大学 特任教授。専門は東アジア考古学。博士（文学）。
九州大学大学院文学研究科修士課程修了。岡山理科大学助手、
講師、助教授、教授を歴任して現職。

古代山城にみる渡来系技術

岡山理科大学 特任教授 龜田 修一

一 はじめに

皆さんこんにちは。亀田でございます。よろしくお願ひいたします。

ちよつとすいません。発表の前にレジュメを一部修正させてください。三十七ページの下から四行目の「それらの系譜について簡単に整理してみたい」を「それらの系譜について、備中鬼ノ城を中心に簡単に整理してみたい」としていただければと思います。備中鬼ノ城を中心にして、他のところをほとんど入れる余裕がなかつたものですから、鬼ノ城中心のお話で進めたいと思います。

はい、それでは枚数がやや多めにありますので少し急いでお話ししたいと思います。

今日のお話でまず大事なところ「古代山城にみる渡来系技術」ですが、幅広く捉えて知識・情報・技術も含めて今回は扱つていきたいと思います。



扱うものとしましては遺跡全体のこと、それから遺構といった構造物の選地とか縄張とか、そんなお話を。それから外郭構造としまして城壁、土と石、版築とか敷粗朶工法、石積みといったいろいろな技術的な部分。さらに門の構造についても少し触れます。内部施設としては、まさに鞠智城の顔であります八角形の建物の系譜などのお話を貯水施設のこと。

それから遺物に関しましては、屋根の瓦、ちょっと細かな話なのですが、門の扉の軸摺金具、門がギギソッて開くときの下の軸のところの金具のお話を。

最後に渡来系知識・情報・技術の系譜、これについて鬼ノ城を中心にながら考えます。行き着くところ、多様な系譜が重層的に重なっているよね、というお話をしたいと思っています。

対象とした古代山城には、朝鮮式山城と神籠石系山城があります。朝鮮式山城は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、六六三年の白村江の戦いの敗戦に関わるものから、七一九年に備後の茨城・常城を止めましたという記録までのお話になります。

神籠石系山城は『日本書紀』などの記録に載っていない古代山城で、よく取り上げられるものが列石、九州の場合、切石で造っていて、瀬戸内の場合は割石が多いです。それから土壘のこと。さらに神籠石系山城には建物がないのではないか?というイメージがありますが、備中鬼ノ城では発見されています。僕は備中鬼ノ城についてはたまたま記録に残っていないだけだろうという認識で考えています。

遺跡・遺構

(一) 選地・周辺遺跡・規模・縄張・高さ・比高差 選地・周辺遺跡(図1)

これから中身なのですが、遺跡・遺構の選地についてまずお話しします。この古代山城の分布図、大まかなものですが、これを見ると北部九州に一塊があつて、瀬戸内海沿岸地域に東西に一つのまとまりがあります。長門は分かっていませんが、周防と伊予で一つずつ、備前、備中、讃岐にも割とまとめてあります。これもやっぱり意味があると思います。僕は百済からの亡命者が築城を指揮していると考えているのですが、彼らがこの地域にやつて来て「この辺をまず守らなきやいけないね」であつたり、「都を守るためにはこの瀬戸内沿岸、特にこの辺つて大事だよね」という具合に地元の人たちから話を聞きながらやつたのか



図1

なと思っています。

縄張・高さ・比高差

先ほどの石川さんのお話にもありましたが、弥生時代の環濠集落と高地性集落が、広い意味での城というのはいいだろう、ということなのですが、それが古代山城まで繋がるかっていうと僕も繋がらないと思っております。でも、こういうV字の立派な溝とか土塁があるわけです。さらに、柵で囲んでいたのだろうという。そういう意味では城的な機能は当然持っているのですが、ただ古代山城には繋がってなくて、古代山城は新たに入ってきたと考えています。

ただちよつとだけ気になつてゐる点があります。この辺を詳しい方はよく御存知だと思うのですが、吉野ヶ里遺跡などには物見やぐらがあるところだけ少し飛び出している部分があります。これ、実は雉城、角楼といったものに繋がる可能性があり、この情報が入つてきたときに中国系のものが入つていた可能性もゼロではないのかな、と思つています。ただし、吉野ヶ里遺跡と古代山城が繋がるかどうかと言えば、繋がらないと思います。

(図2) 左手が備中鬼ノ城で、古代山城は山の頂上付近をずっと囲むことによつてお城を造つています。この頂上部は標高四百メートルぐらいです。中・近世の山城は尾根線上に平場（郭）を造つていきます。岡山県高梁市にある備中松山城は近世初期の山城で、奥に大松山城という中世の土造りの山城があります。有名な小堀遠州が築城に関わつてゐると言われてゐるお城です。このように、選地・縄張も



図2

違いますね、ということです。

(二) 外郭構造

城壁の土と石

さて、外郭の外回りの城壁ですが、土と石の話です。岡山の鬼ノ城の場合、最近は土の部分が結構表に出るようになりましたが、以前は、「屏風折れ」という凄く立派な石垣がよく写真で紹介され、また中世のものではないかともいわれていました。地元の高橋護先生が「これは古代でいいんじゃないの」って言い始めたから古代山城に入つてくるのですが、こういう石垣の部分がどうしても目につくので鬼ノ城は土の城ではなくて石の城、だろうとイメージする方が多いです。ただ、最近の復元された写真や図などでは、基本的に土の城です。

そういう意味で例外的なものが対馬の金田城です。

当時の日本にはこれだけの石垣を造れる技術はありますせんので、明らかに朝鮮半島からの技術が伝わっていると考えていいと思っています（図3）。

朝鮮半島の山城、高句麗、百濟それから新羅とあるのですが、百濟はたくさんの山城を築いています。もう三十年ぐらい前に書いた論文なのですが、洪思俊という先生が作られたデータを基に作ったグラフです。日本の古代山城は、一番小さい城で城周千九百メートルくらいです。城周二千メートル以上の古代山城が、各国に一とか二とか、多いところで三ぐらいあります。先ほど申し上げた岡山の鬼ノ城がこの二千メートル台の一番後ろぐらいです。それから金田城、基肄城、大野城へと順に大きくなっています。それに対し百濟の古代山城は、大きい城も当然あるのですが、ほとんどが城周千メートル以下です。その地域単位の城、それから国家が関与する城もあるでしょうが、基

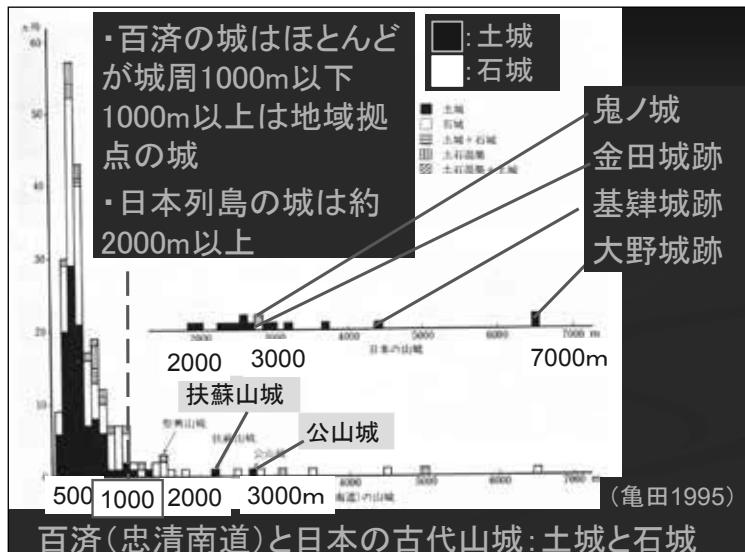


図3

本的に小さい城が多いのです。そのうち、この黒く塗りつぶしている部分が土の城です。土と石のお城、両方あるのですが、土のお城も多いのです。そして、この大きいグループでは、この扶蘇山城は百濟最後の王様の関わった城、それから公山城が五世紀・六世紀の首都に関わったお城ですが、大体この位置なのです。

つまり、日本の古代山城の大きさは百濟山城の中でも大きい部類に入りますので、特別な城、一つの国に一つとか二つしかないということとも話は合うのかな、と思っています。このようなあり方は、やっぱり向こうの人が来て指導したからなのだろう、と思っています。

城壁の版築 (図4・5)

版築の話は、細かな話をするといろいろ微妙なのですが、ひとまず堰板とか枠板とか言っているものを使って作業を行います。こちらは百濟の夢村土城の博物館にあります風納土城の城壁構築状況の模型です。こんなふうに枠を作つて版築作業しているというのですが、この城壁のどこに堰板・枠板の痕跡が見えるのだろうって思っています。よくわからないですね。いずれにしても、版築は綺麗にしています。高さがこれで約四メートルあり、幅二十メートルぐらいだったと思います。立派な版築です。風納土城では敷粗朶とか敷葉と言つてはいる、ちょっと水気の多いところで木の枝とか葉っぱとかを入れながら土を固めていく技法も使われております。紀元後、少なくとも三、四世紀にはこういつたものが百済で造られております。

[版築]: 壁板(せきいた)の使用

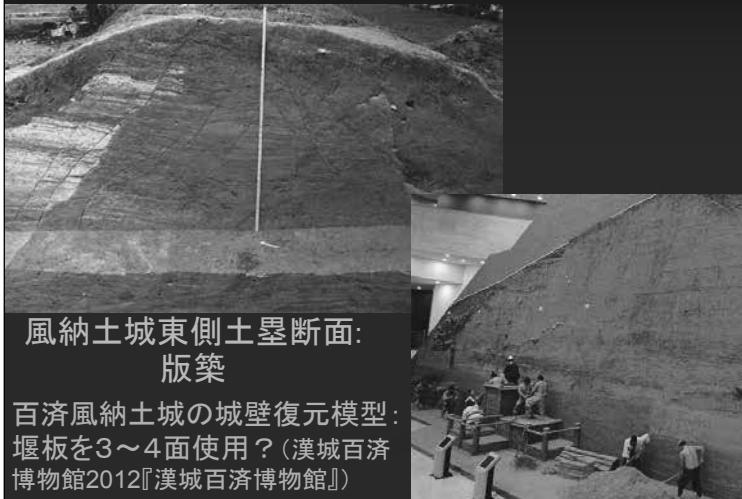


図 4

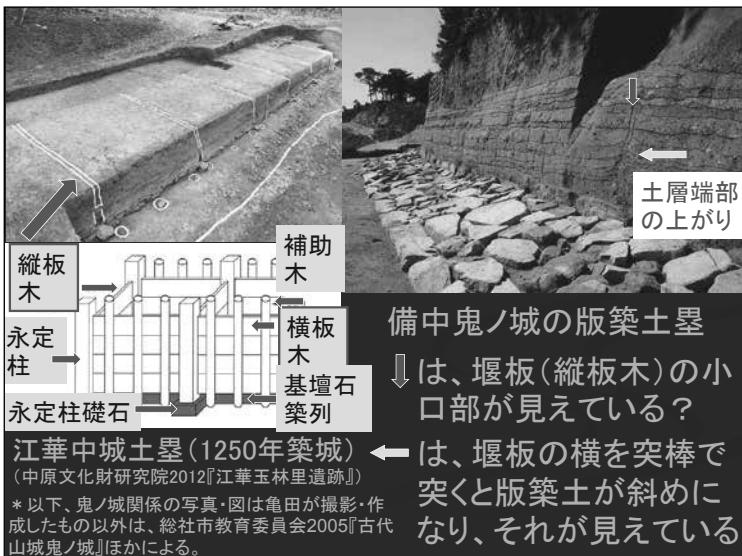
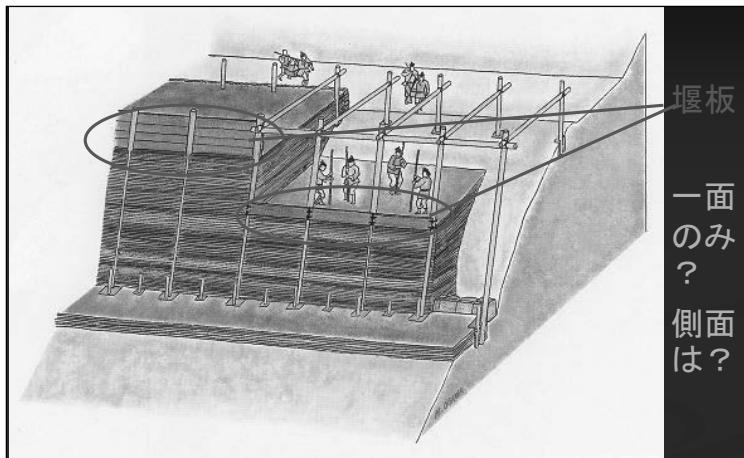


図 5

堰板
一面のみ?
側面は?



豊前御所ヶ谷神籠石版築土壘復元模式図
(行橋市教育委員会2006『史跡御所ヶ谷神籠石 I』)

図6

それから、図5右側が先ほど鬼ノ城ですが、土壘の前に石が敷いてあり、版築も綺麗に出てています。版築の途中に縦方向の筋が何本か見えます。大変興味深いのは、縦筋のところに、ちょっと見にくいでですが、横から版築の土層が来ると、ちょっと上がっているのがお分かりになりますでしようか。縦軸があつたら横に版築の水平盛土です。これは実際に皆さんも版築の実験をする機会がありましたら、板がある壁みたいな所を棒で突くと、どうしても壁際の部分は斜めに上がるんですね。その痕跡だろうと僕は思っております。

それで、左側は高麗時代、一二五〇年に築城された江華中城の土壘です。ソウルの西にある江華島のお城で、実際に、この白い○のところに穴が開いていて、中は版築で、間に仕切り板を嵌めている、というのが分かります。さらに土壘の表面に板の痕跡も残っています。つまり、完成後も板を付けたままにしていました、

ということは分かります。ですから、版築は、きちんと造るにはこういうやり方をしていた、ということは分かります。間に板があると、その際が斜めに上がる、というのはこういう仕組みになるのかなと思います。そういう意味では鬼ノ城の版築に関しては、朝鮮半島の技術がそのまま伝わっているのかな、と思っております。

図6は豊前の御所ヶ谷神籠石の版築作業の復元図です。前面に横に板を掛けているのですが、この横材、下から使つては上に上げというのでこういう想定をしているのですが、この側面部分に関してはまだよく分かつてないこともあります。細かく見ていくとやはりもう少し検討しなきやいけないのかな、と思つております。

城壁の敷粗朶

(図7)

先ほど申し上げた敷粗朶(しきそだ)と言つてゐるものですが、



図7

これ（右上の写真）が百濟の最後の都の扶余の羅城を掘っている時にお邪魔して撮らせてもらった写真です。手前が外側です。外側にこのような枝や葉っぱがあります。これを見ていくと何枚（層）かあります。この少し上のところに黒い点々が見えるかと思います。これも同じものです。この上面にも葉っぱが散らばっていましたので、何枚かに分けて土を積んだものと思われます。この左と下の写真は福岡県の大宰府の水城です。水城の土壘も同じように木の枝などが入っています。左側の写真の枝の入れ方は少し雑なのですが、右下の木の枝の入れ方は凄く整然としています。このように大宰府の水城関係は百濟の泗沘（扶余）羅城などから技術が来ているのだろうな、と僕は思っています。

城壁の列石

（図8）

日本の神籠石の起源に関しては朝鮮半島では類例が



図8

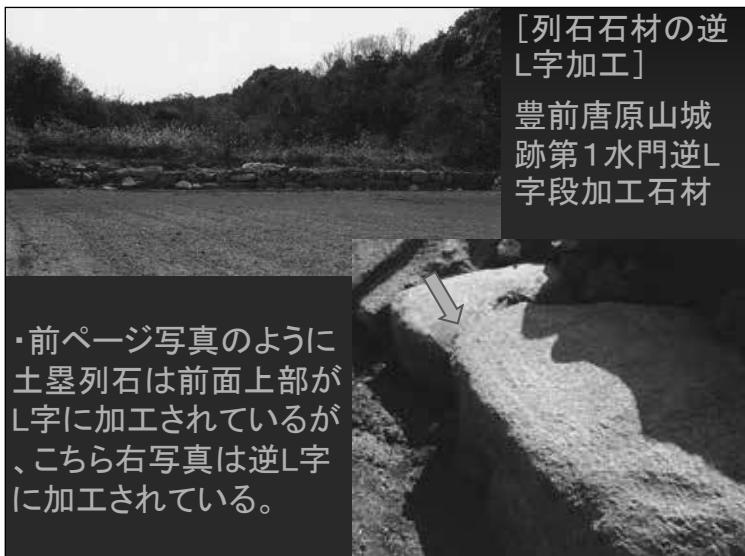


図9

よく分かっていません。その中で可能性があるものが益山猪土城です。左上の写真のように土墨の下に列石が並んでいます。出土瓦からは七世紀前半でいい、と僕は思っています。こういう割石の列石は、まさに岡山県の大廻小廻山城跡のもの（右上）と似ています。かなと思っています。大廻小廻山城跡の方は綺麗に加工していますが、通じるものがあるのだろうと思います。九州の列石は、基本的に切石加工されており、前面上部に右下の写真のようにL字形の加工があります。この上に土を積むのですが、豊前唐原山城の例は、石を並べて、土墨を造る前に止まってしまつた未完成の城だと思っています。余談ですが、十六世紀終わり頃に黒田官兵衛が豊前中津城を造る時にこの石を持ち去つて石垣に使つていますので、もし興味のある方は中津城に行けばこれをご覧になれます。

その唐原山城の第一水門つて言つている所が図9の

スライドです。ここに石列がず一つあるのです。発掘調査を行つた時もこんな感じで残つています。右端の方に通水口があつて、左側の石垣に一か所、ちょっと見にくいけれど右下写真のように、前の方が一段高くなっています。さきほどのL字形に対してもこちらは逆L字形としておきますが、段のある石材が見つかっています。

図10右下の逆L字形加工の石材は、日本の古代山城ではほとんど出てこなくて、あと一か所、大宰府の阿志岐山城にあります。これに関しては、高句麗の集安、將軍塚の横にある、陪塚と言つてゐる古墳の石組みに同じように前が高くなつた逆L字形の段加工がなされた石材があります。そして、高句麗の中期の都集安の山城でした丸都山城でも同じように加工された石材があります。つまり、逆L字形段加工の石材に関しては現時点では他で見つけていませんのでどう繋がるか分かりませんが、ひとまず高句麗の加工技術が入つていて可能性を考えています。豊前のこの唐原地域とうばるにつきましては、『正倉院文書』の中に大宝二年（七〇二）の戸籍が残つております。その中に秦氏関係の名前がいっぱい見られます。そんな地域の石材でもありますので、現時点では高句麗的な加工技術なのかな、と思つています。

城門の算木積 (図11)

これは香川県の讃岐城山城跡、今ゴルフ場になつてゐるのですが、その中に残つてゐる城門跡です。その門の両側の隅角の石の積み方、ここに算木積という言葉を使いました。一般的に「算木積」は中・近世の石垣の隅角部の積み方で、横長の石材を縦横交互に重ねて積み上げます。讃岐城山城跡の例は、



図10

讀岐城山城跡(左)城門跡算木積(7世紀後半)
)と高句麗集安西大塚古墳(右)南東隅算木積
 (4世紀)

→ 4世紀の高句麗と7世紀の讀岐の関係は不明



図11

不十分といえど不十分なのですけど、一応そういう形になつてゐます。ですから、昔からこの部分は積み直したのではないか、という意見も聞きます。その可能性を全く否定するわけではありませんが、僕はひとまず古代のものでよいのかなと思います。この右側の写真は高句麗の集安にある西大塚古墳の隅角の石の積み方です。四世紀の古墳ですが、これも横長の石材を縦横交互に積んでいます。時間も地域も間が空きすぎているので、何とも言ひづらいですが、高句麗という国は花崗岩の加工技術と積み方に關してはレベルが大変高い、と僕は思つています。ですから、どういう形か分かりませんが、そういう情報が讃岐の地域に入つてきても構わないのではないか、と僕は思っています。

土墨前面の敷石

(図12)

それから先ほど鬼ノ城のところで少し説明いたしました。



図12



図13

備中鬼ノ城復元角楼(左)と
対馬金田城跡(667年)雉城(右)
):横長型:百濟

したが、土壘前面の石敷きの話です。この右側の写真は、朝鮮半島の真ん中、忠清北道にある稷山蛇山城跡の写真です。七世紀後半の山城です。この山城、百済にするのか新羅にするのか意見が分かれているところですが、土壘の前面に石敷きがあります。このような三段ぐらいの列石といいますか、石が並んでおります。版築には、縦方向に溝が見えています。このような敷石は、日本の古代山城では例が極めて少なく、朝鮮半島でもあまり見られないものです。

雉（雉城）

（図13）

角楼または雉と呼ばれている施設の話です。この左の写真は鬼ノ城の雉です。坪井清足先生が角楼と名付けたらしいのですが、上に建物がある場合まさに角のところに楼があればそれでいいのですが、この鬼ノ城の例は楼があるのかよく分かりません。いずれにしても、こういう方形の、前面が長くて奥行きは二メー

トルぐらいかな、の狭い施設が出てています。対馬の金田城にもあります（右写真）。以前から、これは積み直しがあるのでちょっと微妙だという意見もあるのですが、ひとまずいいのかなと思っています。金田城の場合も前面が長くて奥行きが短いのですが、韓国の古代山城研究者の車勇杰先生から「こういうのは百濟に多いから、百濟型でいいんじゃないの。」とお聞きしています。

図14の左上の写真は、中国遼寧省の燕州城（白巖城）ですが、ここでは方形に近い形で飛び出しています。ここも積み直しはあるのですが、高句麗から唐の時代のものようです。また、扶余羅城の発掘調査を継続的にやっているのですが、右下の雉城は長さ二十二・四メートル、奥行き五・三メートルあります。こういう巨大な例もあります。これも横長です。そういう意味でいうと、百濟の雉城は横長としていいのかなと思っています。

城壁外面の柱

（図15）

先ほども見ていただいた鬼ノ城の雉の部分ですが、前面の積石の間に柱が挟まっています。雉の上部は全部復元なのですが、発掘している時は、下部の積石が出ても「柱部分」には何も無い、そんな状況でした。担当者も凄く悩んでいましたが、結果的に柱としか考えようがない。類例を探していたら、平壌の大城山城の城壁に柱痕跡があることが分かりました。ただし、これに関しては、朝鮮半島南部地域に出ている例を新しい時代のものではないかといろいろ意見が出ております。しかし、百济の東端、新羅との国境線近くにある大田の月坪洞遺跡、その古い段階の遺跡で、表面に石を貼っている城壁の例が



図14



図15

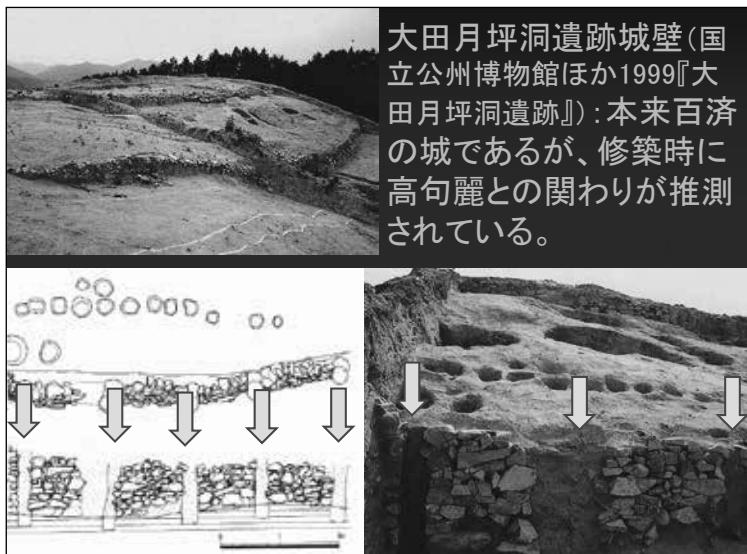


図16

あります。表だけで奥に石はありません。そして、この図16の図と写真。見にくいけれど、縦に溝があります。これは、まさに鬼ノ城と同じようなものです。この発掘の担当者は、月坪洞遺跡からは高句麗が何か関係して修築などをした時にこういう形になつたのではないか、と仰っています。意見は分かれていますけども、ひとまず六世紀か七世紀の遺跡と考えられますので、鬼ノ城の元みたいな技術も、百濟にするのか高句麗にするのか分かりませんが、大田の月坪洞遺跡にはあります。

城門（平門）（図17）

それから門です。一般的に城外から城内へ多少の傾斜はあるにしてもそのまま入る門を平門といいます。これは鬼ノ城西門ですが、外から道が階段状になつて入つていきます。入つていくと、ちょっと階段になつ



図17

た石敷きがあります。もともとの石敷きに門を建てたら現在の復元になつたのですけれども、門の扉のところの石敷きには花崗岩の上等の石を使って綺麗に加工していく、とても素晴らしい！今、現地に行つたらこの石敷きを踏んづけられますけど、これ七世紀の石敷きです。これが、普通、平門と言つていい門です。

城門（懸門）

（図18）

さて、こちらは鬼ノ城の北門で、懸門と呼んでいます。高さを復元しますと、一・六メートルほど段差があります。この下の写真は新しい復元ですが、梯子を懸けて登らないと上がれないね、っていうような形の門です。ここに排水施設もあります。このように段差がある門、梯子を懸けて上がるものを懸門と言つています。

鬼ノ城の北門は段差が一・六メートルぐらい、讃岐の屋嶋城の城門は段差が二・五メートル、対馬の金田

[懸門]

城外から城内へ入るときに2m前後の段差があり、梯子などを懸けないと入ることができない。

[内外の高さの差]

備中鬼ノ城北門: 1.6m

讃岐屋嶋城跡: 2.5m

対馬金田城跡三ノ城戸
: 1.6m

筑前大野城跡北石垣城
門: 1.4m



図18



復元された讃岐屋嶋城跡城門: 門道の下に排水施設がある。

(右: 屋嶋城跡城門現場看板)

向井一雄(2016)は、懸門の高さが3mを超えるものが多い新羅から1.5m程度のものが多い百濟を経て日本列島に伝わったと考えている。

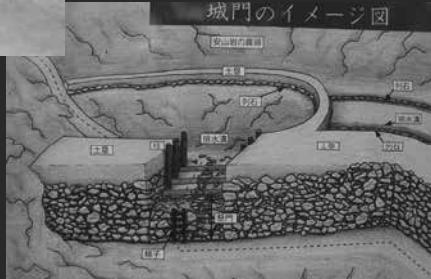


図19

城は三ノ城戸で段差一・六メートルぐらいで、大宰府の大野城の北石垣城門の段差が一・四メートルです。そのままだとすつと入りにくいね、というこの類の門は中世の城にも普通にありますし、実は江戸城、皇居の北桔橋門きたはねばしもんも同じグループのものです。同じような門がずっと古代からあるんですね。ただし、それが繋がっているかどうかはわかりません。

図19の写真は屋嶋城の城門です。門道の下に排水施設が入っている懸門ですが、こんな感じに復元されています。段差部分には階段をつけて整備されています。古代山城研究会の向井一雄さんが、懸門の高さが三メートルを超えるものは新羅が多くて、百済に行つて低くなり、日本に来たのではないか、と仰っています。そういう門でござります。で、後でまた出ますが、屋嶋城も門を上がると、まっすぐ行つたら壁にぶつかって左にしか行けないようになつています。このように曲げて入るっていうのが、中世の枠形に通じるものですね。

門の平面形（甕城・枠形）（図20・21）

先ほどの鬼ノ城の北門は、門を入つていつて左に行くような構造になつています。それから讃岐の屋嶋城の場合は、明らかに左に行く構造です。

百済にある柏嶺山城の南門も懸門になつていて、門に上がつて入つていくと壁にぶつかって、左に曲がつてまた右に曲がつて曲がつてという構造です。これは甕城構造おうじょうぞうと言つていますが、のちの中・近世の日本のいわゆる枠形の類ですよね。ここも排水施設があります。こういう例を見ていると百済の門構

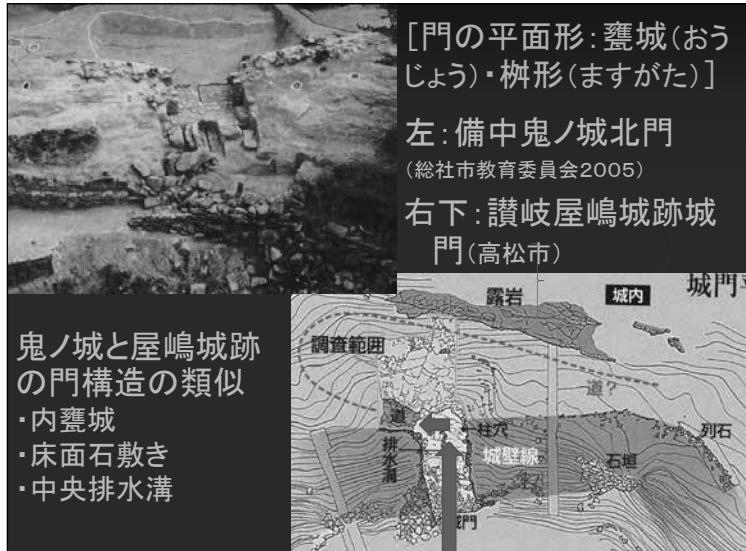


図20



図21

造が入っているのもあるのではないかと思つております。

門礎石・石製唐居敷

(図22)

城門の門礎石には、掘立柱の門柱を添える唐居敷と上に門柱をのせる礎石があります。唐居敷は熊本の鞠智城でも深迫門、堀切門、池の尾門の三つの門から出ています。

鬼ノ城西門には六十センチ四方の掘立柱の門柱、そして唐居敷がありまして、そこに四角い方立の穴があります。方立は、扉をギイと開けたとき隙間ができるので、そこから弓矢とか打たれないようにするための細長い柱です。それから、扉の軸を受ける軸摺穴があります。岡山の鬼ノ城に関しては、門の柱は方形で、このような構造の唐居敷が花崗岩で造られております。

図23は向井一雄さんが作られた図をちょっと加工していますが、面白いことに柱の形が瀬戸内海沿岸地域と九州で異なります。これ山口石城山神籠石のものです、岡山鬼ノ城のものです、兵庫城山城跡のものです、これは香川城山城跡のものです、これらは方形の柱が添えられています。讃岐の城山城跡のものには明らかに未完成の唐居敷があります。これに対して、九州の唐居敷には円形の柱が添えられることが多いのです。その中で金田城はまた違つていて、大宰府にも礎石立ちのものがあります。一般的に掘立柱の門から礎石立ちという石の上に柱を乗せる構造に遷り変わっていきます。やはり地域性もあるのでしようが、現在のところ、掘立柱を添える石製の唐居敷は韓国では分かつていません。日本でも木製の唐居敷がありますので、韓国も多くが木製唐居敷を使用し、石製があまりなかつたのかもしれません。

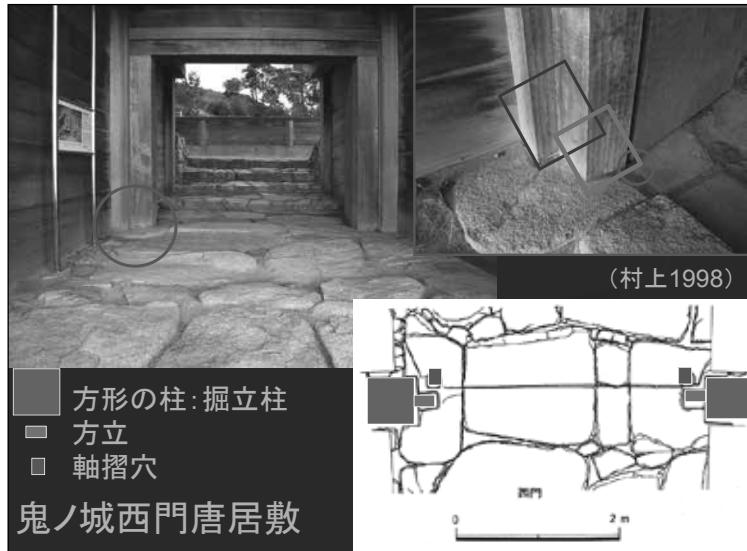


図22

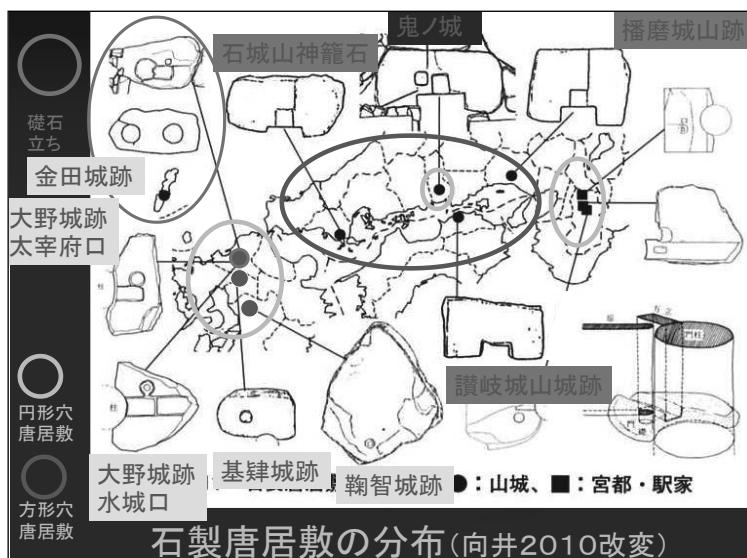


図23

せん。今後も検討を深めていく課題ということにさせてください。

図24は大野城の大宰府口の城門です。大野城のメインの門だと言っている門です。右上が復元図です。両袖は土塁で石貼りしています。ここは谷部なので向かって左側には石垣が造られています。左下写真の奥が城外で、手前が城内です。奥から入ってきて、二列の石列の間に門の建物が造られています。その手前に穴の列があつて、ここに壁を立てます。つまり、敵が入ってきてもまっすぐ入れないようにしているのです。先ほどの甕城と同じような構造を持つています。

この太宰府口城門には造り直しがあって、I期（七世紀後半～八世紀初頭）が唐居敷に掘立柱を添える門なのですが、II期（八世紀初頭～中頃）の城門は礎石立ちです。図25写真の浅い方形掘り込みが方立、深い方形穴が軸摺穴で、方立の外側に門柱が立つ円形の受



図24

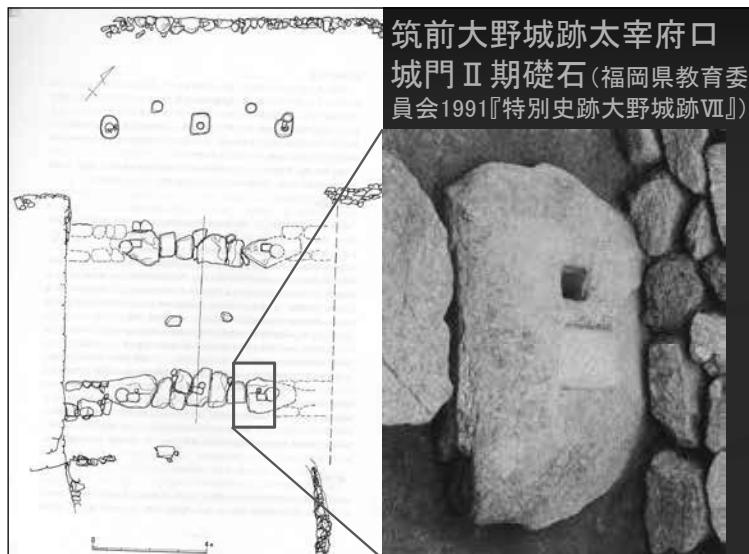
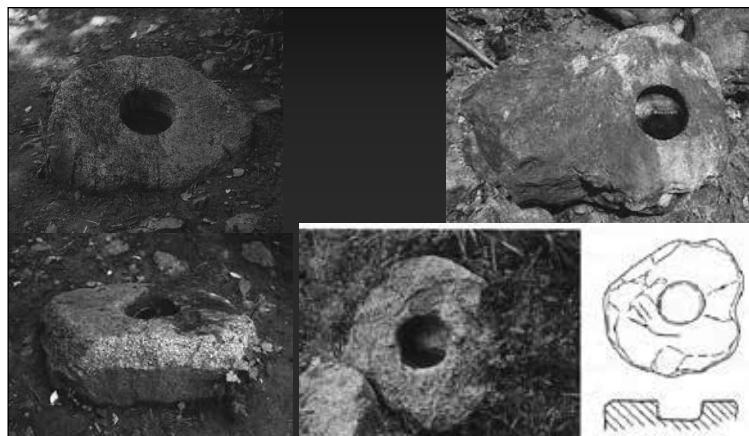


図25



高句麗吉林龍潭山城(左)と対馬金田城跡二ノ城戸(右上)と酒船石遺跡南側(右下:明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』)の門礎石

図26

備中鬼ノ城第2水門と忠清北道城崎山城水門



図27

け部が彫られています。こういう礎石の門に造り変えられます。これが大体八世紀に入った直後ぐらいの時期だらうと考えられています。

あとですね、これはよく分からぬ、ちょっと気になる資料です。図26の左の二つの写真ですが、昔行つた吉林省の高句麗の龍潭山城で見た礎石です。丸穴が開いています。これと似たものは、どこにでもあり得るのかも知れませんが、右上が対馬の金田城、右下の2つが飛鳥の酒船石遺跡のものです。酒船石という松本清張さんが昔、小説にも書いていた石造物があるところの横で、見つかっているものです。これらがどのように繋がるのかはよくわかつていません。今後の検討の材料かな、と思っています。

水門（図27）

さて、水門です。九州の水門や通水口は、基本的に地面にくつづいて、土壠などの下にあることが多いで

す。しかし、鬼ノ城の水門は凄く高いので、以前から気になつております。右写真は忠清北道の沃川城崎山城にある水門です。この写真は韓国留学中に撮つたものですが、水口の高さが二メートルぐらいのところにあります。この高さ、これが直接つながるのかよくわかりませんし単純に構造的に高いのではないかという意見もありますが、いずれにしてもこのような高さの水門があります。図28右下の写真が備前の大廻小廻山城の一の木戸で発掘された水門ですが、いわゆる地面にある水口になります。そして、門の建物がこの左側にある予定なのですが、よく分かつていません。図29の写真は光州の武珍古城のものです。ひとまず百済、というか統一新羅に入つているのかもしれません、こここの地域では水口が地面のところにあります。それから、九州の神籠石に関しましても、2が佐賀県の武雄にある肥前おつば山神籠石の水門の図で水口が地表

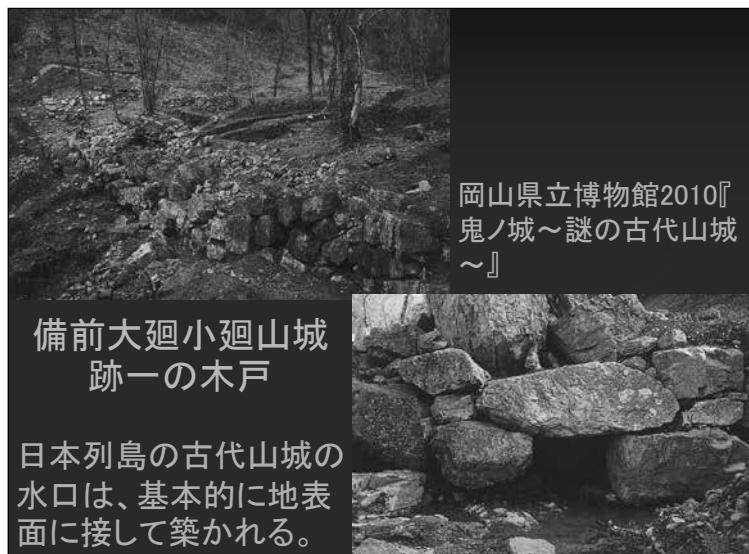


図28

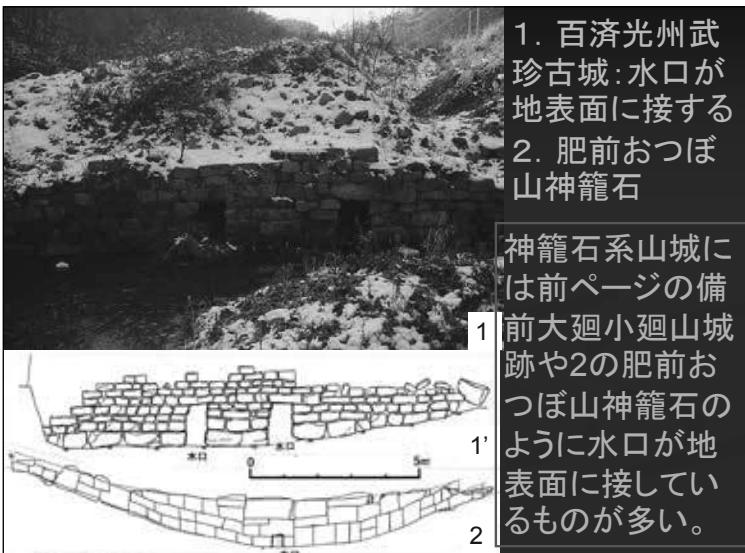


図29

[八角形建物] 鞠智城跡八角形建物

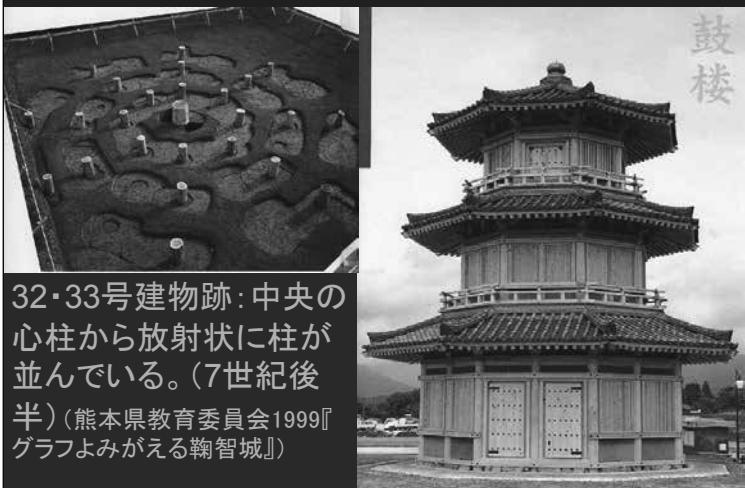


図30

面に接しています。基本的に通水口が下にあるのは百濟に多い、というのは以前から言われています。

(三) 内部施設

八角形建物 (図30)

内部施設は八角形建物から始めましょう。鞠智城の三十二・三十三号建物では中央に柱があり柱列が放射状に伸びて八角形が三重になっています。そして、このような三層の建物に復元されています。しかしこれに関しては、日本国内の古代山城では分かっていない、と思います。

高句麗と日本の八角形建物に関しては、図31の左上の図、この二棟が先ほど見ていただいた逆L字形の加工がある石材で紹介した集安の丸都山城で見つかっています。有名な好太王碑がある集安の山城の建物です。この建物は二つ並んでいるのですが、ご覧のように柱が井桁状に並んでいます。鞠智城の三十・三十一号建物と三十二・三十三号建物は放射状です。ということは、同じ八角形は八角形なのですが、建物の構造が異なります。スケールをほぼ同じにしていますので、見比べてみると、やはり集安の丸都山城の建物の方が大きいのです。右側の八角形建物は、大阪市の難波宮で検出された建物です。大阪城の南側にあるN H K、その南東側で検出された建物跡です。この図は、昔に藤澤一夫先生、百済関係の大先生、が復元されたものを使っていますが、柱が放射状に並んでいます。つまり、鞠智城跡の八角形建物と同じ配置です。ただし、難波宮の八角形建物に関しては、最近改めて、これは天武期

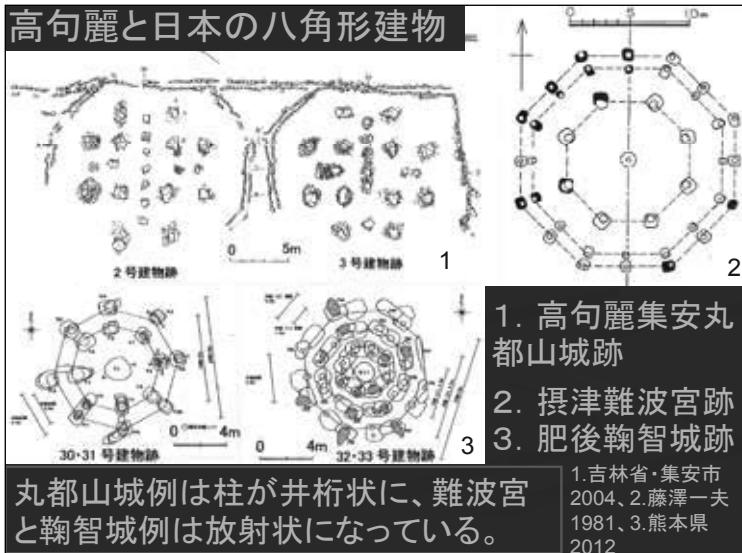


図31



図32

(673～686年)の建物ではないかと仰っている方がおられます。つまり、孝徳朝(645～654年)、すなわち大化の改新の直後にできた建物ではないのではないかと。そうしますと時期がちょっと下がってきて、鞠智城の建物の方が古くなるかもせん。いずれにしても、こういったものがあります。この井桁状か放射状かといった柱の在り方で比較検討すべきものかなと思つております。

図32は集安の丸都山城の建物群の写真です。長い建物の横に、八角形の建物が二つ並んでおります。

それから、僕がいつも気にしているのは、図33です。ソウルの近くの河南にある二聖山城では九角形、八角形の建物が出ていて、その復元図がこれです。一番高いところに長方形の建物や八角形の建物が集まっています。(図34) こういう土器が出て、土馬も出ています。一番低いところには貯水施設があります。こ



図33

の二聖山城に関しては、古くは百濟という話もあったのですが、最近は六世紀後半の新羅の真興王がソウルに進出した後に築いた山城とされています。ここから「戊辰年」と書かれた木簡が出ておりまして、六〇八年か六六八年だろうと言われています。いずれにしても、それぐらいの時期のものです。

発掘を担当した漢陽大学校の報告書には、長方形建物が信仰遺跡、祭祀跡であると報告されています。と言いますのは、先ほどの土馬とか鉄馬が出ているのです。そして、想像の世界ですけど九角形建物を天壇、八角形建物を社稷壇とする理解も示されています。

ちょうど現地説明会みたいな機会に訪れることができましたが、九角形建物の発掘状況はこんな感じでした（図35）。その横が復元図になります。

貯水施設（図36）

あと、貯水施設のお話です。貯水施設は鞠智城にも



図34



図35



図36



新羅河南二聖山城南門横貯水池(方形石組)

図37

出ているのですが、備中鬼ノ城の場合は、土壘で石貼りした土手がよく残っていて、その内側に池があります。こここのポイントは、土壘の前面に石を貼り付けていること。この奥の池は素掘りです。朝鮮半島で出てくる石組みの池ではなく、素掘りの池です。

図37は先ほどの二聖山城の貯水池です。これは長方形に石で組まれた貯水池です。このような池が、先ほどの建物群から一番低い場所に造られています。これは、新羅で見つかっている池になります。この図38の貯水施設は新羅か百濟か意見が分かれている、大田の鶏足山城跡で出てきた貯水施設です。ここは何度も修繕されていまして、内側、右側の丸くなっている池がI期で、この下（底）にいろいろ木組みなどされていて、ここから出土した土器が百濟か新羅で揉めています。こここの担当の方の考えでは、少なくとも新羅だ、という話になっています。しかし、鶏足山城は、少なくと

も七世紀には百済が押さえていたことも間違いなさそうなのです。古代山城というのは、特に韓国の場合は古代に限らず、取つたり取られたりということになっています。いずれにしてもこういう石組みのものが、六世紀の半ばぐらいに造られています。

三 渡来系知識・情報・技術を使用した

古代山城の遺物

瓦 (図39)

次に瓦の話です。以前から、小田富士雄先生が北部九州の古代山城関係の軒丸瓦を分類されています。鞠智城の軒丸瓦は、百済系、高句麗百済系、百済・新羅系といろいろ意見があります。図40の上の二つの写真の瓦は鞠智城の六十四号礎石建物から出土しており、七世紀後半または七世紀末の土器を伴います。一番大事なところは、鞠智城の軒丸瓦は瓦



新羅・百済大田鶴足山城貯水池(東より)：中央のものが1次貯水施設(忠南大学校百済研究所2005)

図38

3. 遺物

[瓦]

小田富士
雄による北
部九州古
代山城出
土の7世紀
後半の軒
丸瓦

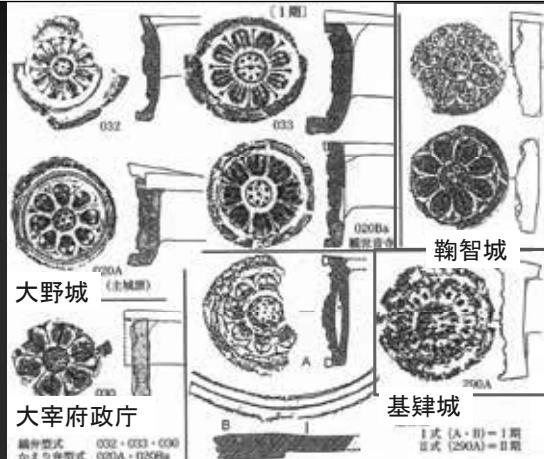


図39



図40

当部の上に出来上がった行基式丸瓦を被せただけの「丸瓦被せ技法」だ、ということです。普通の軒丸瓦は瓦当の外縁が丸くなるのですが、「丸瓦被せ技法」だと上だけ被せるから外縁の下半がないのです。これは日本では基本的に出てきません。朝鮮半島では、忠清南道の千房遺跡という百濟地域で出ています。でも僕は新羅瓦と思っています。これが新羅瓦だという理由は、この慶州月城跡から出た瓦、これの周りに溝を持つ瓦は、新羅瓦に多いのです。ということで、僕は鞠智城跡の瓦は新羅系の可能性を考えています。「丸瓦被せ技法」の瓦は、今のところ肥後の鞠智城、韓国忠清南道の千房遺跡、筑前の大宰府政庁、そして武藏国の高麗郡、今の埼玉県の高岡廃寺などで出ています。以上のように、肥後鞠智城跡の軒丸瓦に関しては、僕は近年、新羅系の可能性を考えています。

軸摺金具

(図41)

最後に、城門の軸摺金具の話です。大野城の北石垣城門、懸門ですが、ここから実際に出てきた軸摺金具があります。唐居敷に嵌められた雄金具ですが、唐居敷に嵌め込む部分が方形になつてているので、いろいろ検討が進められています。日本では肥前の基肄城東北門の唐居敷軸摺穴と大和の山田寺東面回廊中央扉口の地覆石から雌金具が見つかっています。朝鮮半島では以前から少しづつ確認されていましたが、新羅の三年山城や忠州山城に雌雄セットの軸摺金具があり、大野城北石垣城門唐居敷の軸摺金具と同系と見る意見もあります。



- ・土墨は版築土墨で、その下部に水門(排水施設)が作られている。
- ・城門(矢印下)は懸門で、城外と約1.4mの段差があり、その前面には石が貼られている。



図41

四 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の

遺跡・遺構・遺物の系譜

この地元の渡来系技術者の中に新羅系や加耶系の人物が含まれている可能性はある。

筑前大野城築城においても近くの大野郷の人々が参加したことは十分推測でき、その中に新羅系の人物が含まれている可能性は十分ある。

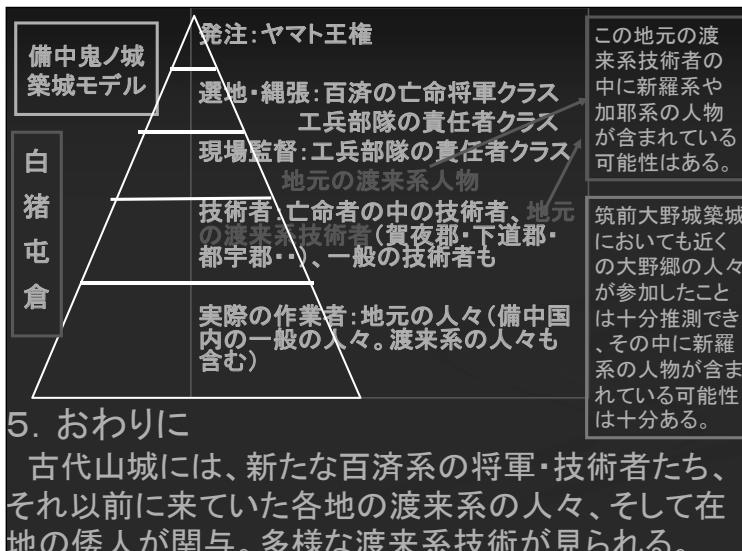


図42

これまで、古代山城にみられる渡来系の知識・情報・技術について、遺跡・遺構・遺物を対象に簡単に整理してきました。それらの系譜について、一先ずまとめるべく、単純に百濟系だけじゃなくて、高句麗だ、新羅だ、というものがありますよ、という話になります。

この話を具体的に、備中鬼ノ城を対象として検討する（図42）と、発注者はヤマト王権で、選地には百済の亡命将軍・貴族クラスと工兵部隊の責任者クラスが関わっているのではないかと思っています。その下のところ、現場監督にあたる役割には工兵部隊の責任者クラスや渡来系の地元の人達なども関わっている。そういう中で重層的な渡来系の技術が入り込んでいるのかな、と思つております。

つまり、具体的な遺構や遺物を細かく検討すると、少なくとも百濟のみの技術で築かれたとは考えづらいのです。それまでに日本列島に渡つて来ていた多様な朝鮮半島の人々も古代山城築城には関わっていたと考えることで、各地の古代山城の多様性や個性が説明できのではないかと考えています。

ご清聴いただきありがとうございました。

(図43) (図44) (図45)

[おもな参考文献](日本の報告書以外)

- 岡山県立博物館2010『鬼ノ城～謎の古代山城～』
小澤佳憲2016「日韓の古代山城出土軸摺金具」小田富士雄
編『季刊考古学』136、雄山閣、74-76
小田富士雄2016「大宰府都城Ⅰ期軒丸瓦考」『古文化談叢』
75、九州古文化研究会、193-209
亀田修一1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3
亀田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』
研究会編『鬼ノ城と吉備津神社—「桃太郎の舞台」を科学
する』吉備人出版、58-71
亀田修一2016「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」小田富士
雄編『季刊考古学』136、雄山閣、93-96
亀田修一2021「古代山城と地域社会—備中鬼ノ城を中心と
してー」熊本県教育委員会編『令和2年度(2020年度)鞠智
城座談会 地域社会からみた鞠智城』17-31

図43

- 亀田修一2022「第2章 日本の考古学—西日本の古代山城—備中鬼ノ城を中心に—」亀田修一・白石純編『講座 考古学と関連科学』雄山閣、21-38
- 姜鍾元・崔ビヨンファ編2007『錦山栢嶺山城—1・2次発掘調査報告書—』忠清南道歴史文化院(韓国)
- 漢陽大学校博物館2006『二聖山城 二聖山城発掘20周年記念特別展』(韓国)
- 金善基・趙相美2001『益山猪土城試掘調査報告書』圓光大学校馬韓・百濟研究所(韓国)
- 金秉模・沈光注編1988『二聖山城(2次発掘調査中間報告書)』漢陽大学校博物館(韓国)
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004『丸都山城』文物出版社(中国)
- 総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城—展示ガイド—』
- 総社市教育委員会2007『国指定史跡鬼城山(鬼ノ城)—古代山城への誘い—』

図44

- 百済古都文化財団編2018『扶余羅城 東羅城IV—陵山里山區間 雉・城壁—』(韓国)
- 公州大学校博物館編1996『千房遺跡』(韓国)
- 国立公州博物館1999『大田月坪洞遺蹟』(韓国)
- 国立扶余博物館2003『扶余羅城』(韓国)
- 中原文化財研究院2012『江華玉林里遺跡』(韓国)
- 向井一雄2014「鞠智城の変遷」熊本県教育委員会編『鞠智城跡 II —論考編2—』75-105
- 向井一雄2016「西日本山城の城門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、58-62
- 向井一雄2017『よみがえる古代山城』歴史文化ライブラリー 440、吉川弘文館
- 村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古ライブラリイ2 吉備人出版

図45